

◆ 大津別院の建築物 ◆

書院（本堂後方）



書院は、寛文2年（1662）の近江・若狭地震によって倒壊、寛文10年（1670）に再建されました。格式が高く上段の間や書院が設けられ天井や壁、襖などに様々な絵が描かれていて江戸時代初期の書院建築の遺構として貴重なことから、昭和36年に重要文化財に指定されています。

徳川三代（家康・秀忠・家光）が上洛する際に東本願寺第12代教如上人・第13代宣如上人はこの地において会見され、また後年には明治元年（1868）と同13年（1880）の明治天皇行幸における行在所となりました。

区分：重要文化財（昭和36年6月7日指定）

構造：上段八畳、対面所十八畳、八畳五室、縁より成る、一重、入母屋造、本瓦葺

建築年代：寛文10年（1670）再建

本堂

本堂は慶安2年（1649）に再建されたもので、彫刻や平面の構成など江戸時代初期の真宗寺院建築の特徴を伝える貴重なものとして、昭和36年に重要文化財に指定されています。

区分：重要文化財（昭和36年6月7日指定）

構造：桁行九間、梁間十間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺

建築年代：慶安2年（1649）再建

真宗大谷派 東本願寺

大津別院



◆ 大津別院の歴史 ◆

真宗大谷派大津別院は、東本願寺第12代の教如上人が創建した別院です。東本願寺創建の2年前、慶長5年（1600）6月27日に御本尊・阿弥陀如来像の御移徒が行われたと御坊記録にあります。

天下人の豊臣秀吉が慶長3年（1598）8月に死去した後、台頭する徳川家康と石田三成らの対立の緊張が最も高まり、「天下分け目」の慶長5年9月15日の関ヶ原合戦へ向けて、いよいよ両者が大きく動き始める頃のことです。

当時、琵琶湖の水運によって交通の要所であった大津には琵琶湖に面した大津城があり、浅井三姉妹の次女・初を妻にした京極高次が城主でした。家康は上洛の際には必ず大津に滞在したといわれます。教如上人は有力な豪商の直参門徒がいた大津の地に、家康と親交を深めるために大津別院を創建したといわれます。

慶長5年6月に入ると家康は会津（上杉）征伐を開始、対して三成は7月に拳兵して伏見城を攻めます。大津城主の京極高次は一旦西軍に属するものの、西軍1万5千名の軍勢を手勢3千名で迎え撃つことを決め、9月7日から14日夜まで大津城において籠城戦が行われました。連日砲撃を受けた高次がついに力尽きて、開城したのは関ヶ原の合戦当日、9月15日の朝でした。このため西軍の大軍勢が関ヶ原に参陣することが出来ず、合戦の勝敗に大きな影響を与えたといわれています。

合戦後の20日に大津に入る家康を教如上人は大津別院で迎えています。徳川家臣の金森長近に宛てて御礼と更なる仲介を頼む9月22日付の教如上人直筆の書状（八尾市立歴史民俗資料館所蔵）が残されており、大津別院での会見が東本願寺創建について重要であったことが伺えます。

◆ 大津別院の法宝物 ◆

「親鸞聖人等身御影」【教如上人下附・本堂内陣】

大津別院創建の翌年、慶長6年（1601）9月13日に教如上人が下附されました。この御影について『御坊記録』に「教如上人様、子細これあり暫く御隠居の御時、聖人の御骨を砕かせられ、絵具加えあそばされ御自身図画し御安置の御影なり。是れ日本に二幅の御影と申し伝える。」と記されており、教如上人が大津別院を重要視されていたことが伺えます。

「観如上人御影」【教如上人下附・本堂北余間】

教如上人の次男である観如上人は、慶長16年（1611）に新門となって大津別院の住職に就任されますが、同年11月25日に14歳でお亡くなりになりました。たいへん悲しまれた教如上人は、翌年1月18日に観如上人の御影を下附されました。観如上人は東本願寺を継職されていない方であるため、御影の製作・下附は非常に少ないといわれます。

真宗大谷派（東本願寺）大津別院

- ・住所 滋賀県大津市中央2丁目5-25
- ・電話 077-522-6960（FAX 兼用）
- ・アクセス JR 大津駅から徒歩 500m
京阪浜大津駅から徒歩 750m
京阪島ノ関駅から徒歩 500m

参拝希望の方は事前連絡をお願いいたします

